

第2弾 Group F

051 ~ 060 各話タイム10分

▶お申込み記入用紙

ご希望のお話にチェックをご記入のうえ、放送申込書と併せてFAXにてご返信下さい。

051 ~ 060 まで10話パックでのお求めはこちらにチェックをご記入下さい。.....

Pack F

051

051 天狗の鹿笛 /10分

三度の飯より獺が好きで藤兵衛はある日、山中で天狗と出くわした。天狗は鹿笛をくれて、今度は家に良いものを持っていくから人払いをしておけと言った。数日後、家にやって来た天狗をごちそうでもてなし、天狗は、万能の膏薬とその処方を藤兵衛に渡そうとしたが、怪しんだ藤兵衛の嫁がこっそり覗いていたために天狗は処方を書いた紙を残し、慌てて飛び出した。藤兵衛は、膏薬の処方には人に譲ってしまったが、鹿笛だけは今も大切に代々受け継いでいる。



052

052 六角地蔵堂 /10分

とても平和な村に徳の高い浄海というお坊様がいた。寺の近くには浄海をととても慕っている六人の男たちが住んでいて六人衆と呼ばれていた。そんなある日、村をコロリ病が襲った。そして彼岸の入りには六人衆は全員が不思議な夢を見た。六人の奇妙な夢を聞いた浄海は、六つの願いを立て六角地蔵堂を建てなさいと伝えた。それから六人衆が六角地蔵堂を建て始めるとコロリ病も治まり、この村には平和が戻った。



053

053 玉絹物語 /10分

横暴な地頭を父に持つ玉絹は、困っている村人に自分の着物や食べ物を分け与え、少しでも罪滅ぼしをしていた。ある日玉絹は、村人に養蚕と機織を教えていた若い修験者の正寛と出会う。二人は親しくなり、それを知った地頭は怒り狂って、年貢の軽減を懇願してきた正寛を牢に入れてしまう。そして次の日、正寛は帰らぬ人となった。玉絹は嘆き悲しみ、正寛の亡骸を抱え花山水の麓の池に身を投げた。その出来事の後、地頭は供養碑を建て、年貢を軽減した。



054

054 喜之助稲荷 /10分

昔々、凶作続きの村で村人は、なんとか生き延びようとしていた。そんなある日、五平の家に喜之助という旅人が一夜の宿を頼んできた。喜之助は村の窮地を知って力になることを決意する。そして喜之助の夢枕に稲荷様が立って「都から米や野菜の種を持ってきなさい」と告げた。喜之助が運んだ種をみなが一心に植えると、年々豊作になっていった。村人たちは稲荷様に感謝し、ここに喜之助稲荷を建てた。



055

055 おな石婆さん物語 /10分

腕のいい漁師の息子、真佐司と与佐司はとても元気で素直な子供だった。ある日、父親が漁で時化に遭い帰らぬ人となった。二人の兄弟は、嘆き悲しむ母のトメを支えながら立派な漁師に育っていった。やがて父親に劣らぬ漁師となった二人の息子だったが、ある時漁に出たきり行方がわからなくなってしまった。トメは入江が見渡せる場所で戻らぬ息子たちの名をずっと呼び続け、やがてこの場所で石になってしまったのだった。



056

056 三方の沼と白鳥姫 /10分

大昔、日光の二荒山と赤城山の神様は激しく争っていた。この神様たちは三方の沼の三兄弟に応援を頼んだ。中の沼、下の沼は日光神に味方をしたが、上の沼は赤城山の姫を妻にめとっていたため、赤城山の味方になった。戦は日光神が勝利を治め、敗れた上の沼は命を落とした。悲しみに耐えかねた妻は、白鳥に姿を変え、上の沼で命を絶ってしまった。その次の春、上の沼には白鳥の姿に似た美しい蓮の花が咲き、ジュンサイが一面に広がっていた。



057

057 五百川物語 /10分

京の都に住む紅姫は是之という位の高い男と結ばれ、皇子もでき、幸せだったが、ある日、皇子が乳房を噛んだことが元で病に伏した姫は亡くなってしまった。怒り狂った是之は「皇子を都から数えて五百番目の川の外に捨てて来い」と家来に命じた。家来たちは仕方なく夜中に皇子を連れ出した。家来たちは、五百番目の川があまりにも小さかったので、一本前を五百番目とし、そこに留まった。そこで命を落とした皇子のためにその地に八つの神社を築き「帳付神社」と名付けた。



058

058 又右エ門猫と西念坊 /10分

昔、又右エ門という妻に先立たれた爺さんがいた。ある日、又右エ門は道端で苦しむ老婆を連れて帰って介抱してやった。そして二人は一緒に暮らすようになった。村人の婆さんに対する悪い噂を一笑した又右エ門だったが、ある晩出かけた婆さんの後をつけると、なんと婆さんの正体は又右エ門の財産を狙う化け猫だった。通りがかりの西念坊という坊さんが化け猫退治に乗り出し、生杉の葉をいぎして、化け猫を追い出した。



059

059 烏峠稲荷神社の伝説 /10分

平安時代、天皇から「蔵安蔵宗」という山賊の討伐を命ぜられた藤原俊仁は、山賊に押され白河の方まで後退した。先回りしていた山賊に囲まれたとき、輝く絹をくわえた一羽の鳥が飛んでいくのが見えた。そして鳥が落とした絹を、白狐がくわえて山の方に消えていった。それを見た俊仁は「あれは我が氏神であるに違いない」と言い、軍の士気を上げ、山賊を打ち負かした。その後凱旋の折、この地に俊仁が建てた社を村人たちは「とうげさま」と崇めた。



060

060 来迎寺と酒呑童子 /10分

ある日、次郎や久作と山にかや刈りに出かけた貞松は先頭になって黙々と歩くうちにみんなとはぐれた。独りになった貞松は、不思議な赤い光を放つ魚を見つけて食べてしまう。やがてみんなと合流した貞松は突然顔が熱いと叫びだし、頭から角が生え鬼になった。そして安達大良山の方へ飛んでいき、人を食うようになり、皆から恐れられた。しばらくして、酒呑童子と名づけられた貞松は源頼光によって首を落とされ、亡骸は鬼松山来迎寺に埋められた。



ご希望のお話にチェックをご記入のうえ、放送申込書と併せてFAXにてご返信下さい。

061 ~ 070 まで10話パックでのお求めはこちらにチェックをご記入下さい。 Pack G

061

061 遅沢地蔵 /10分

遅沢のハッチヌキという所を通ると、急に馬が暴れ怪我をしてしまう。ある日、イタズラ好きの平太と権太がこの場所を張っていると、馬を連れた末吉という若い男がやってきた。案の定、馬が暴れ荷物飛び、その荷物が権太に当たった。怒った平太は末吉とケンカになった。すると地面から不思議な声したので掘ってみると、地蔵様が見えた。地蔵様は三人に感謝し、イタズラ好きで喧嘩っ早い心を改めるように諭した。その後、地蔵様はこの地にお祀りされた。



062

062 味方不動尊 /10分

戦国時代の終わり頃、結城義親は佐竹義重との争いで苦戦していた。家来の寛成は、命を落とす寸前、弟の正成に形見として小さな仏像を残した。それを受け取った義親は天を仰いだ。その時、義親の後から、突然少年二人が現われ、義重の軍勢の中に消えていった。しばらくして義重軍の断末魔の声が聞こえた。引き上げてきた二人は「不動明王の使い、こんがら童子とせいたか童子なり、行く末も汝らを守らん」と言った。その後、その場所には不動明王が祀られた。



063

063 歯形の栗 /10分

昔、浪江の町へ土地を求めてやってきた三人の家族。毎日一生懸命力を合わせて働き、幸せな日々が続いた。しかし娘のアキが突然病気で倒れてしまう。そして最期のとき「栗が食べたい」とか細くささやいた。雪の降り積もる中、季節はずれの栗を探しに向かった父がなんとか見つけた栗を一かじりしてアキは逝ってしまう。その後、食べかけの栗と一緒に申った彼女の墓にはりっぱな栗の木が育ち、そこに成る実には今も不思議と歯形がついている。



064

064 岩崎砦の米の滝 /10分

鎌倉時代の本郷あたりは、本郷左エ門という知恵も力もある男が治めていた。彼の軍は絶壁に切り立つ岩崎山に砦を築き立てこもった。長期戦に備え大量の食糧を運び上げ、用意周到であったが、やがて深刻な水不足が起こり始めた。敵陣もそのことに気づき裾野を取り囲んだのだが、そこは知恵もこの本郷左エ門のこと。うろたえる家来たちをよそ目に、砦より大量の米を流し滝に見せかけ、その光景を目の当たりにした敵軍は負け戦を認めたのだった。



065

065 大悲山大蛇物語 /10分

大悲山の薬師様へ目を治しにやってきた玉都。満願となる日、人間の姿をした大蛇が近付いてきた。大蛇はこの地を大沼にして移り住むことが出来れば玉都の目を治し、殿様にしてやると約束した。もし他言すれば命を奪うと言い、姿を消した。喜ぶ玉都だったが、観音様に諭され、急いで殿様へ訴えた。そして玉都は命を奪われてしまった。殿様の陣営は竜に化身した大蛇に立ち向かい、勝利した。竜は空高く消え、里に平和が戻り、人々は玉都に心から感謝したのだった。



066

066 降居姫伝説 /10分

神代の昔、天上に住む降居姫という娘の両親は、地上で炭焼きを生業としてまじめに働く平助という男の姿に惚れ込み、姫の婿に迎えようとする。姫は両親の言いつけを守り、このことを平助に告げ天へ昇る方法を教える。平助は美しい姫に惹かれ、天上へ昇ろうとするが一度失敗し、二度目に成功して天上で結ばれる。しかし二人の仲に嫉妬した両親が平助を目の敵にして、平助は天上を後にする。平助を追った姫は天の川で離ればなれになり一人鹿島の地に辿り着くのであった。



067

067 源翁和尚と熱塩温泉 /10分

源翁和尚という高僧が、作太郎という男を伴い水害に悩まされている熱塩村へ向かった。道に迷い通りがかった一軒の家で、村が水害にあっているのは大蛇が暴れているためだと教えられた。源翁と作太郎が川に向かうと、目の前に子を孕み、産みの苦しみから川を暴れさせている大蛇が現れた。和尚が念仏によって大蛇を苦痛から解放してやると、大蛇はこの川の橋になり、尾があった場所に温泉が湧き出した。その後、源翁和尚はここに索現寺を建て終生の地とした。



068

068 如蔵尼 /10分

今から千年以上も昔、平将門の娘で滝夜叉姫という姫がいた。やがて将門が同族との権力争いに破れると、姫は奥州へと逃れた。姫は奥州でひっそりと暮らしていたが、ある時病に倒れて、あの世へと旅立ってしまった。あの世でえんま大王に裁きを受ける場で地蔵菩薩と出会った姫は、現世での善行や信心深さを認められ、もういちど現世に戻してもらった。自分の清らかな行いで現世に戻ることができた姫は、その後一生を仏の道に捧げ、より一層信心に励んだ。



069

069 岩清水伝説 /10分

村で評判の働き者の太助は、おトメ婆さんに勧められ、お絹という娘と結ばれた。お絹は丈夫で働き者だったが、しばらくすると疲れからか倒れてしまった。太助は日鷲神社に願をかけた。満願の日、太助の前に神様が現われ、お絹の身代わりにと神様は太助の胸を矢で打ち抜いた。気を失った太助は「下の川で石を割りそこから湧く水を飲ませよ」という神様の言葉を聞いた。お告げの通りにすると、お絹はやがて回復し、その後二人は幸せに暮らした。



070

070 里白石悲恋物語 /10分

里白石の城主である相模守晴光には美しい奥方と目に入れても痛くないほどかわいがっている桜という娘がいた。桜は特に歳の近かった家老の息子、小太郎といつも一緒に遊んでいた。しかし成長すると全く会えなくなってしまった。そして桜は十五歳の夜、こっそりと小太郎との再会を果たし一目でひかれあった。しかし身分違いの仲が許されるはずもなく、小太郎が命を絶ち、姫も後を追ひ、乳母のしのみまでもが二人の後を追うという悲しい結末をむかえた。



ご希望のお話にチェックをご記入のうえ、放送申込書と併せてFAXにてご返信下さい。
071～080まで10話パックでのお求めはこちらにチェックをご記入下さい。

Pack H

071

071 宇迦神社の由来 /10分

4世紀の半ば頃、ある村を大干ばつが襲った。「西国の神へのお参りをせよ」というお告げを聞いた村の若者ヒロは、なんとか西国の神社を参拝してまわった。ある日、摂津難波の地でヒロの夢枕に白蛇の化身という老人が現れた。老人が「東国に戻して欲しい」と言って残した箱を背負って、ヒロは帰途を急いだ。再び姿を現した老人は「飯沼に祀ってくれば必ず霊験をあらわす」と言った。その言葉に従うと飯沼の水がコンコンと湧き出し始めた。



072

072 怪物と逆岩/10分

大昔、村を支配する大善坊という怪物は田畑を荒らし、湖で飛び跳ねては洪水をおこしていた。そこへこの地を横取りしようと大団坊という怪物が現れた。大善坊と大団坊は湖を飛び越える勝負をした。負けた大団坊がくやしきのあまり立岩を思い切り蹴飛ばすと岩は割れて山の上に逆さに突き刺さった。逆岩と名付けられたその場所は近くに薬師堂が建てられ、御参りすると元気で力強い子供に育つと言われるようになった。



073

073 機織御前姫と亀石/10分

勇壮な景色を織り成す川の近くに住む機織問屋の姫はここが好きで、いつも大きな亀の背中に乗って遊びに来ていた。ある時その姿を二本松城主の子、次郎武時が見初め、妻にめとり、子供もできて幸せな日々を送っていた。だがある日、姫は突然、自分は天女だと告げ、一人天へと帰ってしまう。残された武時は、児子山に舞台を作り、毎日舞を舞わせて姫を呼び戻そうとしたが、舞い降りた姫は子供をしっかりと抱きしめ、天へと帰って行ってしまった。



074

074 子安観音 /10分

暑い夏の日、田んぼを見回っていた作治は不思議な女性に遭遇し、誘われるまま後をついていった。やがて女性は川にさしかかり、渡ろうとするがその女性はなんと川に落ちてしまった。作治はあわてて川に飛び込み、川から救い上げたのだが、なんとその姿は息子の太郎に変わっていた。実は彼女は観音様であり、息子の太郎が溺れている所に作治を導いてくれたのだった。



075

075 善導寺の黒仏様/10分

村に住む孫助は、寺の本堂を改築し村人の相談役にもなっていた。仏様をお願いして山賊退治に成功した孫助はますます信心深くなっていった。亡くなった妻のために観音堂を建てることにした孫助は、京に新しい仏様を迎えにいった。仏様は盗まれないように金箔の上から墨を塗られて黒仏様と呼ばれていた。孫助はそれを持ち帰る道中で息を引き取ってしまうが、孫助の末期を悟った大山六佐衛門は孫助にかわって、黒仏様を善導寺に運び安置した。



076

076 栗野地藏 /10分

見事な藤棚のある茶屋で休憩した旅の途中の弘法大師に、茶屋の娘のお藤が一目惚れし、彼が飲み干した茶碗に残る泡をすった。そして赤ん坊を身籠ってしまったお藤。お藤の父である茶屋の主人は、弘法大師が再び立ち寄った際に、大師を問い詰めた。しかし赤ん坊が幻であることに気づいた弘法大師が赤ん坊に息を吹きかけると、その姿は泡になってしまう。幻であった赤ん坊を想うお藤のため、大師は代わりに杖の柄を削り地藏を刻んで残していった。



077

077 観音様のご利益 /10分

昔、三島に吉兵衛というとても信心深い老人がいた。彼は愛犬を連れ遠く離れた立木観音に毎日願をかけに来ていた。吉兵衛は満願を迎えると、伊勢参りに出かけた。そしてそこで思い立ち、舟に飛び乗り四国の金毘羅様へと向かうのだが、途中舟が動かなくなり、船頭が「獲物を探しに来たサメだ」と言った。吉兵衛は危うくその餌食になりそうになる。しかし立木観音様を一心に祈ると舟は静かに動き出した。このとき、観音様の所に愛犬シロの姿があった。



078

078 龍口寺の竜神 /10分

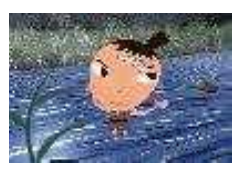
昔、ある村が干ばつに襲われ、困り果てた村人たちは、山で毎日雨乞いを続けた。ある日、山頂で突然空が雲で覆われ雷鳴が轟き大嵐となった。混乱の中、六助という若者は雨乞いしていたみんなを何とか下山させたが、自分が雷にうたれてしまい、気を失う。目を覚ました六助は、目の前にいた竜神に敢然と挑んだ。竜神は六助を試したのだといい、勇気を称え、村の繁栄を約束する。



079

079 寺掘の毘沙門天/10分

昔々の北会津村の寺掘地区と西麻生地区の間に曲がりくねった川が流れていた。悪戯4人組の雄太たちは魚捕りに出かけ、奇妙な人形のようなものを見つけた。近づいて引っ張りあげようとする、手や脚が外れてバラバラになってしまった。次の日川へ行ってみると、人形は元に戻っていた。なんとその人形は毘沙門天様だったのだ。寺掘へ連れ帰り、お祀りすると、それから魚はいっぱい獲れるようになり、また河原で迷子になる子供はいなくなったそうだ。



080

080 汗かき地藏 /10分

昔々、日照りが続き干上がってしまった川があった。様子を見に行ったら村人が干上がった川底でお地藏様を見つけ土手まで上げようとしたが、全く動かなかった。その夜、月の呼びかけに目を開けたお地藏様は、土手一面に咲く桜を目にした。そして月の声に従い、お地藏様は歩いて土手まで上った。その後、雨が降り続いた。ある時お地藏様は、村で流行った病気を、全身に汗をかいて治してくれた。それから汗かき地藏と呼ばれるようになった。



第2弾 Group

081~090
各話タイム10分

▶お申込み記入用紙

ご希望のお話にチェックをご記入のうえ、放送申込書と併せてFAXにてご返信下さい。

081 ~ 090 まで10話パックでのお求めはこちらにチェックをご記入下さい。●●●●●●●●●●

Pack I

081

081 樽淵の話 /10分

昔々の表郷村の堀ノ内というところは、大きな川が曲がりくねりあちこちに深い淵ができていた。この淵は水害や干ばつをもたらし村人たちを苦しめていた。村人たちの間ではここに悩みを持った竜神が住み着いたという噂があった。村長が常在院の玄翁和尚に相談を持ちかけると、玄翁の前に難産に苦しむ女性が現われた。この女性の正体は竜神であった。玄翁が念仏によってお産を助けると、竜神はこの村に水害をもたらさないことを約束したのだった。



082

082 小坂子育地蔵様のはなし /10分

昔々、五兵衛が朝起きると、家の庭先にお地蔵様の姿があった。妻や村人に聞いたが、心当たりのある者は一人もいなかった。数日後、この村に住む若夫婦が病気の子供を助けて欲しいと五兵衛の家に飛び込んできた。そこでお地蔵様に必死でお願いすると、すぐに子供は回復した。若夫婦は大層感謝し、手彫りのお地蔵様をお納めした。それ以来、お地蔵様の数はどんどん増え、祭礼の時、子供たちが箱車にお乗せして引いて回るようになった。



083

083 常姫物語 /10分

昔、佐布川村の江川長者に美しい娘がいたが、その娘は若衆達の憧れの的であった。やがて成長し常姫と呼ばれるようになった娘は、花見の時に富塚伊賀守盛勝に出会い、一目で恋に落ちた。しかし、盛勝は祈願の為妻を持ってないという。それでも盛勝のことを強く思う姫は恋患いの末、息を引き取ってしまう。悲しみに暮れる長者は夢に出てきた聖人の勧めで、姫の等身大の観音像を作らせ供養してやった。



084

084 角力とり仁王 /10分

妙法寺坂の燈明杉の辺りは昼なお暗く、化け猫や山賊が出ると言われていた。力自慢の泰造と権次郎もここで化け物に襲われたが到底かなわなかった。しかしある時、化け物の正体が仁王であることを突き止めた。数日後、村人たちと観音堂の下で眠っている仁王を見つけ、天井裏に封じ込めた。この仁王は仁王門に祀られていたのだが、新しい仁王が来たために追い出されて暴れていたとも、自由になって悪戯したものだとも言われている。



085

085 狐の恩返し /10分

北田城の城主・正隆は、狩りで傷つけた鹿の親子の様子が気に入り、敵軍に不穏な動きがある中森へ向かった。鹿の親子は無事だったが、その側で傷ついた狐を見つけた。正隆はこの狐の介抱を如来堂の和尚に頼んだ。その後、からくり橋を渡り攻め入った先陣が橋から落ちたのを見た敵軍が、隣橋を渡ると、橋は消え、みな堀に沈んだ。橋は狐がかけた橋だった。こうして正隆は狐の恩返しにより戦わずして勝利をおさめた。



086

086 風邪引き地蔵 /10分

大きな屋敷に奉公に来にきていたイネはいつも赤ん坊を背負って働いていた。その姿を見た主人は「一日で一反の田植えを済ませれば、郷へ帰らせてやる」と約束した。夢中で働いていたイネは、赤ん坊の様態が悪くなるのに気づかなかつた。そして田植えを終えた頃、赤ん坊は息絶えていた。その後、村は凶作が続いた。困り果てた村人はお地蔵様を建てた。それから村は豊作となり、お地蔵様の首に縄をかけてお願いすると風邪を治して下さるようになった。



087

087 上新城の大日如来 /10分

六十六部行者の忠左衛門は、大日如来を乗せた大八車が突然動かなくなった。困った忠左衛門が村の娘と話していると六助が通りかかった。六助はこの村で山火事が頻繁に起きているので「大日如来のお堂を建て村を守って欲しい」と頼まれた忠左衛門はそれを承知してやり、村人たちが力を合わせ、立派なお堂を建てた。三人がお参りしていると突然、大日如来の全身から汗が噴き出し、山火事が起こっていることを教えてくれ、大事には至らなかった。



088

088 おまん狐と小豆とぎ /10分

辺川に住む竹三とトメは、ある雪の夜、おまんという老婆を一晩泊めてやった。それからしばらくして、トメは亡くなってしまった。トメの葬儀を済ました竹三が家に帰ると、亡くなったはずのトメの姿があった。ある日トメが、「私はおまんという狐です。私も先が短い身だが竹三に不自由はかけない」と言い残して消えた。その後、家の周りから「小豆とぎましよか」という声が聞こえ、村人たちが気味悪がったので、竹三はおまんを祀ってやった。すると声は聞こえなくなった。



089

089 小鶴明神 /10分

昔、小鶴が池の近くに行徳爺さんの家があり、ある日、彼は池で羽を休ませている二羽の鶴を見つける。しばらくして行徳爺さんは鶴の巣に二つの卵があることに気づく。しかし直門という若者はその卵を煮て食べようと家に持ち帰り、気味の悪い思いをし、行徳爺さんのもとへ卵を返しに来る。行徳爺さんが卵を鶴の巣へ戻してやると、煮たはずの卵からヒナが生まれ、その後には反魂木が残っており、つるは霊鳥としてこの地に祀られた。



090

090 大峠の稲荷様 /10分

昔々、山に人をだます白狐があり、困っていた樵たちは稲荷様を祀ると村に平和が続いた。十数年後、伊達輝宗の軍勢が会津を攻め討ちしようとし、穴沢加賀は守り切れなかった責任をとるために、切腹しようとした。が、どこからか勝鬨が聞こえてきた。それを聞いた伊達軍の軍勢は穴沢にはまだ多数の軍がいると勘違いし、退却していった。勝鬨は稲荷様から発せられたもので、それからこの稲荷様は「勝鬨稲荷大明神」として崇められた。



ご希望のお話にチェックをご記入のうえ、放送申込書と併せてFAXにてご返信下さい。

091 ~ 100 まで10話パックでのお求めはこちらにチェックをご記入下さい。

Pack J

091

091 屋根から小判 / 9分45秒

大昔、ある山間に、呉作とお玉という老夫婦が住んでいた。子供はいなかったが、シロという老犬と仲良く暮らしていた。二人は毎日こつこつ小銭を囊に貯めていた。ある日、囊を開け銭を数えていた二人の様子を義助が見ていたが、シロに吠えられその場を去った。しばらくして囊を盗んだ義助が、自分の家で囊を開けると、中はママシでいっぱいだった。逆上した義助は呉作の家の屋根に登り、室内に囊の中身をぶちまけた。しかし飛び出したのはママシではなく、たくさん的小判であった。



092

092 猪苗代湖の主 / 9分45秒

ある村の庄屋の家に、竜三という男が働かせて欲しいとやってきた。それから休むことなく働く竜三を心配した庄屋が休ませたのだが、しばらくして部屋から片いびきが聞こえてきた。覗いてみると、なんとそこには大蛇の眠る姿があった。その夜、竜三は湖の主であることを告げ、湖で悪行を繰り返す大鱈と戦う刀を貸して欲しい、そして見守って欲しいと頼んだ。あくる日、湖の水の色は、大鱈の血で真っ赤に染まっており、村は水害から守られた。



093

093 子守地蔵 / 9分45秒

昔、ある小さな農村に住む弥助とお菊という夫婦に子ができた。ある日、二人で野良仕事をするために畦道に寝かせていた赤ん坊の太助に近づく女の人がいた。女の人は、太助を見てあげてから、仕事を続けて下さいと言った。やがて仕事を終えると、女の人は何も言わずその場を立ち去ろうとしたので、後をつけていくと、秀明院の境内で姿を消し、そこのお地蔵様の台石に泥がついていた。それからこのお地蔵様は子育延命地蔵として祀られている。



094

094 猫やしき / 9分45秒

ある農家の一人息子米蔵の嫁にきたお美代は、主人の治作と姑のツネにいびられていた。ある日、飼い猫のタマが化け猫の正体を現わし歌と舞いでお美代を慰めたが、他の人に話したら、命を奪うと脅した。しばらくして、お美代の悪い噂が村中に流れ、責められたお美代は、タマが化け猫であるということ話を話してしまう。家族はこれを信じてタマを捨て、平穏な日々が続いた。しかしある日、お美代の喉笛をタマが噛み切り、お美代は静かに天国へと召された。



095

095 ほらふき孫左衛門 / 9分45秒

ほらふきで有名な孫左衛門という男。大工仲間に江戸の殿様から呼ばれたと大ぼらを吹き、親方にいさめられ慌てて江戸城改築の手伝いに向かった。江戸で出来た仲間の為吉夫婦に自分の里の自慢話をした。里に戻った孫左衛門を為吉たちが訪ねてきて、「うそじゃねえか」と責めたが、孫左衛門が自分のついたほら話の信憑性を話すと、その話のあまりの見事さに怒る気にもなれない為吉たちは、これからも仲良くしようと言い江戸に帰っていった。



096

096 カシャ猫伝説 / 9分45秒

昔々、トラという猫を飼っている仲の良い老夫婦がいた。ある日、爺さんが隣町に芝居見物に出かけ、婆さんはトラと留守番することになった。その晩、寝付けなかった婆さんの前でトラが突然『桃太郎』を演じた。その後、トラは「オラは化け猫で、このことをしゃべったらただじゃおかない」と脅したが、婆さんは爺さんに話してしまう。爺さんはトラを川へ捨てたが、トラは川上の志津倉山にたどり着き、そこで死体を食べるカシャ猫になった。



097

097 安珍清姫物語 / 9分45秒

宿屋の主人と妻の千が、ある日熊野神社で女の赤ん坊を見つけ、清と名づけ大事に育てた。幾年か過ぎたある日、宿を求めた旅僧の安珍は、清が気に入る「お嫁にならないか」と軽い気持ちで言った。五年後、再会した安珍に清は迫った。しかし、修行中の身である安珍は逃げるように去ってしまい、清は蛇の姿になって追いかけた。やがて道成寺の鐘の中に隠れていた安珍を見つけ、鐘に蒔きつき火となって安珍もろとも焼き尽くし、二人は天へと召されていった。



098

098 瀬知坊淵の河童 / 9分45秒

昔々ある村に、河童の仕業で馬が頻繁にいなくなるという噂の立つ淵があった。ある日作之助は、自分の馬をつかって河童を捕え、罰として大事なお宝の光る玉を取り上げた。それからしばらくして、作之助に男の赤ん坊が生まれたが、7つになっても歩くことが出来なかった。ある日、河童からもった玉を背負わしてみると、息子は立ち上がって走り出し、淵に飛び込んだ。作之助は、あの子は河童の化身だったのかと悟り、七年間楽しませてくれたことをしみじみと感謝した。



099

099 タニシのツブ太郎 / 9分45秒

タニシのツブ太郎とツブ助は人間のような顔の殻を持っていた。ある日、ツブ太郎は人の良い老夫婦にすくわれ、『自分は人間だった』という声を聞き、不恰好だが人間の姿となった。その後ツブ太郎は、富豪の家の風呂焚きとなったが、主人に跡取り娘と共に追い出されてしまう。娘が腹いせにツブ太郎を蹴ると、ツブ太郎の背中から大きな貝殻が飛び出したかと思うとなんと目の前には男前のツブ太郎がいた。それから二人は老夫婦の下へ戻り、幸せに暮らした。



100

100 姥捨て山 / 9分45秒

老人を山に捨てる風習のある村に竹造一家と六十歳になる母親が住んでいた。竹造は母を山に置き去りに出来ず、家の縁の下に大きな穴を掘り、そこに隠して住ませた。一年後、隣国の殿様が無理難題を出し、解けなければ国を攻め落とすという事態が起こった。お触れを見た竹造は、縁の下の母親に相談すると、母親は難なく問題を解き、竹造はそれを殿様に伝えた。喜んだ殿様に城に呼ばれた竹造は、母親の話をした。それ以来この国は姥捨て禁止になった。

